



浜松市地方創生 SDGsコンテスト 事例集

令和5年度・令和6年度

H A M A M A T S U C I T Y S D G s C O N T E S T

令和5年度 浜松市地方創生SDGsコンテスト

一般の部 優秀賞受賞者取組事例

P1,2	一般社団法人里の家
P3	NPO法人ラブ・ネイチャーズ
P4,5	浜松調理菓子専門学校
P6,7	愛管株式会社 れんりの子（認可保育園）
P8,9	株式会社平出章商店

高校生の部 優秀賞受賞者取組事例

P10,11	浜松開誠館中学校高等学校SDGs部
P12,13	浜松学芸高等学校 社会科学部地域調査班
P14,15	オイスカ浜松国際高等学校 環境SDGsプロジェクト

令和6年度 浜松市地方創生SDGsコンテスト

一般の部 優秀賞受賞者取組事例

P16,17	中村建設株式会社
P18,19	株式会社JACKカンパニー
P20,21	siisow株式会社

高校生の部 優秀賞受賞者取組事例

P22,23	静岡県立浜松商業高校調査研究部
P24,25	吉田恋菜
P26,27	オイスカ浜松国際高等学校 環境SDGsプロジェクト

地方創生SDGsコンテストとは

企業、団体、個人、市内高校生が浜松市内において実施している、SDGsの観点から地域の活性化や社会課題の解決につながる取組事例について、「一般の部」と「高校生の部」に分けて募集し、優れた事例を「優秀賞」として選出・表彰するものです。優秀な事例の情報発信を通じて、取組の裾野拡大や、横展開を図り、本市における地方創生SDGsの取組につなげることを目的としています。

一般社団法人里の家

マミーの森 遊びの森と木地師の森づくり

取組概要

- 子どもの自然あそびが減少していること、木材の利用がスギ・ヒノキ中心になっていることを課題と考えて取り組んでいます。
- 都田町内の放置されていた約3haの二次林を、使うことで「維持される里山」「木地師(きじし)の森と森林体験」をテーマに整備を進めています。
- 植樹や定期的な手入れを通じ、里山体験ができるフィールドづくりをしています。また、森づくりを通じて循環型の暮らしづくりを進めています。



はじめたきっかけ

高校時代に環境問題に興味を持ち、「何か行動を起こさなければ」と強く感じました。日本の自然や伝統文化を求めて旅をした経験から、子どもたちに伝統工芸を伝えたいという想いが強くなり、里山体験プログラムを始めました。

2002年に現在の活動の前身となる取組を始め、2019年に一般社団法人を設立、2021年から「木地師の森」の整備等に取り組んでいます。

ポイント

自然保護と子どもの遊び場の創出、災害に強い森づくり、木材利用を視野に入れた植林など、里山を多面的に活用できるように整備する取り組みをしています。

保育士や林業の専門家と協力しながら、森づくり体験や里山体験など環境教育プログラムを実施しています。

地域課題と取組成果

子どもの自然遊びが減り、自由に遊べる森も少ない中、里山体験・自然体験のフィールドとして、整備、保育園の里山体験の受け入れなどを行っています。また脱プラスチック、循環する製品づくりへの時代ニーズに対応するため、器や家具として利用できる樹木の植樹・育成に取り組んでいます。

近隣の保育園や自然保育グループ「野遊びでおさんぽ会」がフィールドを利用しています。また原生林保護で協定を結んでいる企業との連携のほか、企業や学生との連携を進めています。取組を継続することで、子どもの頃に自然学校で体験した人が再び訪れるようになるなど、人の循環も生まれています。

- | | | | |
|-------|-----------------------|---------|---|
| ●事業内容 | 親子の里山体験を提供 | ●設立年 | 任意団体設立2005年 法人化2019年 |
| ●構成員 | 約100名(スタッフ6人、会員家族30組) | ●HP URL | http://satonoie.org/index.html |

●里の家では、どのような活動をされているのですか？

加藤さん:「里山モデルの創造」「里山の生業、暮らしや伝統文化、食文化、伝統工芸の継承」「世代を超えたコミュニティの醸成」「子どもたちの成長をサポート」の4つを柱としています。失われた里山とコミュニティの再生を目指し、年間を通じた里山体験を中心に自然環境の調査や保全、生業の調査・研究・実践、人材育成などに取り組んでいます。

●このような活動を始めようと思ったきっかけを教えてください。

加藤さん:環境問題に関心を持つようになったのは高校生の時でした。『成長の限界』を読み、がく然とし、何か行動を起こさなければと強く感じました。その頃から、「環境問題を解決するために必要なことは何か」「人が人になるために必要なことは何か」と、今も自分に問い続けています。30代前半まで、日本の自然や伝統文化を求めて旅をしました。和紙や竹細工、鍛冶、染め物、木地師などを訪ね歩き、北海道では半年ほど農家さんのお世話になったこともあり、新鮮な野菜を食べ、天の川を眺め、野生動物を感じる原体験や伝統文化を子どもたちに伝えたいという思いが強くなっていきました。



里の家代表・加藤正裕さん



●人としての原点に立ち返ったような経験をされて、浜松にたどり着いたのはどうしてですか？

加藤さん:浜松には海があって、湖、平野、台地、山もあります。自然体験の場所として遠州がふさしいと考え、浜松へ引っ越しました。浜松は高速道路や新幹線も通り、グローバル企業も多い都市です。都田川は天然のアユが遡上する清流です。当時は第二東名高速道路の開発が予定され、都田近くに新しいインターチェンジができると思いました。そんな都田で物件を探していた時、この古民家に出会い、現在の活動拠点となっています。市街地から1時間もかからない場所で、こんなに立派な古民家が残されていることに驚きました。田んぼと畑と森があるまさに里山でした。活動する場所として理想的で「ここで始めなさい」と言われているような気がしました。

●「マミーの森」について教えてください。

加藤さん:マミーの森は、二次林をいかに整備し、活用するかがテーマです。子どもから青年まで、誰もが楽しめる場所を目指しています。他にも、アロマに利用できる樹木、器などの木地や家具に適した樹木を植えています。二次林は都市部の周辺に多く、この取り組みが浜松の周辺地域に横展開できればと思っています。

●里山体験活動に参加されたきっかけは何ですか？

川合さん:お母さんたちは、毎日仕事や家事に追われ、癒される時間や場所がほとんどないなと考えていたとき、この場所を知り、活動させてもらうようになりました。今ではここに来るだけで、気持ちが開放的になって、心が軽くなるのが分かります。人が用意したもので遊ぶのもいいですが、森の中で遊ぶと、子どもたちの好奇心や興味が、どんどん広がり、自然がもたらす、無限の可能性を感じることができます。自然の中にいると、大人が生き生きすることに魅力を感じました。子どもたちにとって一番幸せな環境は、周りの大人たちが楽しく生きていることなのかなと思います。



里山体験で講師を務める川合さん

奥浜名湖の貴重な生き物に寄り添う

🌈 取組概要

- 奥浜名湖周辺には、シラタマホシクサやヒメマイトトンボといった、貴重な生き物が生息しており、環境保全が課題となっています。
- 絶滅危惧種のシラタマホシクサを守るため、湿地の整備を行ったり、未来へ引き継ぐための種蒔きや見守りを24年間続け、貴重な自然環境を守っています。
- 県内では都田川にだけ生息しているヒメマイトトンボの生息調査・啓発活動を19年間続け、地域全体で環境を守る意識を高めています。



🌈 はじめたきっかけ

浜名湖花博のボランティアリーダーの中から自然環境に関心をもつ会員が中核となり、2001年に団体を立ち上げました。会員全員が自然系の有資格者で、得意分野において個々に主体性をもって活動しています。

🌈 ポイント

貴重な生き物たちが生息する環境を守るため、20年以上にわたり環境保全や啓発の活動をしています。環境講座やパネル展示などを通じ、地域住民や企業に貴重な自然に対する関心を根付かせることに取り組んでいます。会員の活動は、団体の情報としてネットで全員が共有協力し、幅広い行動を伴う啓発活動を継続しています。

🌈 地域課題と取組成果

銅鐸公園では、シラタマホシクサの保全に取り組んだ結果、以前はあまり訪れる人も多くはない公園でしたが、最近はシラタマホシクサを懐かしみ、リピーター含め遠方から訪れる人が絶えない明るい公園になり、活性化につながっています。ヒメマイトトンボは、5年間生息が確認できませんでしたが、環境の保全と調査を続けた結果、2020年の調査で生息が確認でき、以降少数ですが生息が確認できています。

- 事業内容 シラタマホシクサの保護保全・子ども自然学校の企画運営・自然体験講座の企画運営
- 設立年 2001年
- 会員数 17名

浜松調理菓子専門学校

食から未来を作る『地産地「承」』

取組概要

- 核家族化や地域交流の減少等により、食文化を継承する機会が失われてきています。あわせて地元の食材の消費もされなくなってきました。
- 地産地「承」の考えの下、食育活動を通じた食の伝承、継承を目指しており、食育として「食の幼稚園、食の小学校」として子供向けの料理作りと食育講話、高等学校での模擬授業等を行っています。



はじめたきっかけ

見栄えや美味しさにこだわった食、健康食などは「流行りの食」としてSNSなどで急速に普及していますが、一方で「食」本来の意味や尊さ等は置き去りになってしまっていると思います。日本古来の食文化、旬の食材、地域の特産品といった身近な食についても、実は知らないという大人や学生も多く、これらを伝えていくことが急務であると考えました。

ポイント

調理菓子専門学校の特長・専門性を活かした活動をしています。

地域での食育事業は生徒の育成だけでなく、食文化の継承を通じ、旬の食材や地域の特産品への関心を高め、地域の活性化や若者が集まる地域づくりに貢献しています。

地域課題と取組成果

食文化を継承し、地産地消につなげる取組として、地域企業や団体、学校と連携し、廃棄されてしまう摘果みかんを使ったチョコレートの共同制作や、浜名湖で食害の原因となっているクロダイを使ったメニューを考案するなど、地域の課題解決に具体的に取り組んでいます。食育活動は、一般の調理実習とは違う専門的な説明が聴け、また、環境問題の勉強もできるため、子供や保護者から高い評価を受けています。学生だけでなく、地域への食育活動を通じて、地域や環境の問題を「知ってもらう」という第一歩に貢献していると感じています。また、企業や団体、学校とのメニュー考案では売り切れが続いており、経済効果は限定的ですが、地域や環境問題を知るきっかけ作りに貢献しています。

●事業内容 調理師、製菓衛生師養成施設として学校を運営

●創業年 1964年

●従業員数 15名

●HP URL <https://www.hama-cho.net/>

●食育に力を入れることになったきっかけを教えてください。

校長に就任したのは、3年前の2021年でした。まさにコロナ禍のど真ん中で、イベントを開催しようにも人を集めることができませんでした。何もできない状況の中で、学生や地域に対して、私たち学校ができることは何か、何度も考えました。本校では10年以上前から、小学校などで食育授業を続けてきました。子どもたちが「すごい、すごい」と喜びながら学ぶ姿の後ろで、保護者の皆さんが熱心にメモを取り、授業後には積極的に質問をします。実は多くの保護者が、食についてあまり知りません。

考えてみればそれにも理由があって、今、子育てをしている世代の親世代である70、80代の方が若かった頃は、バブルの真ただ中で、家族を大切にしたい気持ちはあっても、どうしても仕事を優先してしまう方が多かった。核家族化や地域交流の減少もあって、親から子、孫へと身近な食文化を受け継ぐ機会が失われてしまいました。おはぎや味噌といった、昔は家庭で当たり前で作られていた食品を、今では多くの人が作れません。もちろん、YouTubeやレシピを見れば作れると思います。しかし、それは伝承とは言えません。この食文化をもう一度伝えていかなければいけないと気付いたとき、私たちが長年行ってきた食育授業が、一番の手段だと確信しました。そこで、持続可能な取り組みをしようと「ハマチョウSDGs」を立ち上げました。



●具体的にはどのような活動をされているのですか？

食育の推進、リカレント教育のための場づくり、地産地消の促進、そして、おばあちゃんの料理や知恵の伝承といった活動をしています。また、『HAMA+IKU(はまいく)』というフリーペーパーを通じ、これらの活動を発信しています。最初のプロジェクトとして、子ども用のコックコートを作りました。幼稚園や小学校で食育授業をすると、子どもたちが口にする「コックさんの格好になりたい」という夢を実現するためのものです。地域の企業もこの活動に賛同し、13社から協賛金が集まりました。



●産地や生産者に寄り添うようになった経緯について教えてください。

スイスにある一ツ星フレンチレストランで修業していたときのことです。現地の方たちは、日本なら捨ててしまう野菜などの生ゴミを養豚場に提供していました。すると、数日後、養豚場からおいしいベーコンが届けられました。当たり前のようにしているこのサイクルに驚き、食材を大切にすることの本質を学びました。地域の食文化や食材について、子どもたちに伝えていきたいと考えています。先日、天竜区春野町でシカが増え、農作物を荒らして困っていると相談を受けました。そこで、浜松調理菓子専門学校の学生だけでなく、静岡文化芸術大学や東海調理製菓専門学校、浜松学院大学、農林環境専門職大学、常葉大学から50名ほどを集め、シカを解体し、命をいただくことでシカ肉の有効活用を考えると、いうイベントを計画しています。「シカがかわいそう」という感情だけでは、山はどんどん荒廃してしまいますから。料理の知識や伝統的な知恵が親から子へと伝わっていないため、月に2回、食に関するリカレント教育を開催し、学校の先生や保護者の方など、多くの方に参加いただいています。



●今後の夢や目標はありますか？

1つは、浜松の食材や食文化を世界に発信することです。例えば、浜松はバイクのまちですので、世界的なバイクレースを浜松で開催する。世界中から浜松にレース観戦にすれば、絶対に食事が必要になりますので、浜松の食に注目が集まります。このような機会を作りたいですね。もう1つは、食育に関連して、小学校6年生の子がレシピを見ずに、切り干し大根を使ったアレンジ料理を作れるようになること。そのためには、小さな頃から切り干し大根をはじめとした食材を知らないといけませんし、料理の技術や火の扱い方を学ぶ必要があります。『地産地「承」』を進め、子どもたちの未来を守り、子どもたち自身も自分の未来を守る世界を作りたいと考えています。

愛管株式会社 認可保育園「れんりの子」

未来の環境リーダーを育てる 認可保育園「れんりの子」小さな保育園から始まる大きな変革

取組概要

●愛管株式会社が運営する認可保育園「れんりの子」では、保育を通じて「未来の環境リーダーを育成する」ことを目的に様々なことに取り組んでいます。脱炭素の取組を学ぶ一環として、地中熱を活用するビニールハウスでは、園児たちは環境にやさしいエネルギー利用を学んでいます。「こどものうえん」が併設されており、子どもたちが自ら作物を育て、給食の食材として利用したり、自ら調理して食べたりといった食農保育をしています。



はじめたきっかけ

愛管株式会社中村代表取締役の「保育園での素敵な体験をもっと多くの人々に提供したい」という強い願いから、認可保育園「れんりの子」を設立しました。保育園での特色である食農保育の提供により、自分で考え、自分で行動できる「生きる力」を育み、未来のリーダーとして成長を促しています。

ポイント

地中熱利用ビニールハウス、廃材リサイクルなど、地域の環境と経済活動を同時に促進し、持続可能な未来への実践的な歩みを提案する取組です。幼い頃からSDGsに携わった園児たちが、将来日本の経済を牽引するリーダーになると考えており、長期的な視野で取り組む投資となっています。

地域課題と取組成果

未来の環境リーダーを育成するという点において、食農保育、廃材リサイクルは、子どもたちの創造力を刺激しています。また、地中熱利用ビニールハウスは、実例が少ない中で注目を集めており、保育園の見学や高校生からの取材など、様々な機会が生まれています。教育活動が地域社会に広がり、保育園は高い評価をいただいています。園児への食育保育を通じて、保護者の食に対する考え方や行動にも変化が見られるようになりました。地中熱利用や廃材リサイクルなどのプロジェクトは、地域のサステナビリティ意識向上や農産物の価値再発見に貢献しています。また、これらの活動は環境保護と経済促進を両立し、視察や取材の機会を通じて広がりを見せています。

●事業内容 保育園の運営

●創業年 2020年

●従業員数 140名

●HP URL <https://hoikuen-lenri.com/>

● 保育園事業を始めたのはなぜですか？

私はひとり親で、父と祖父と祖母に育てられました。お寺が運営する保育園に通っていて、お寺のご家族とともに成長したと言ってもいいほど、とても楽しい時間を過ごすことができました。あの時間がなかったら、きっとグレていたはずですよ（笑）。この体験を多くの人に伝えたいと思い、父に保育園事業の提案をしたところ、初めて「いいじゃないか」と言ってくれました。偶然にも、敷地の隣に保育園の設計を専門とする設計士がいっぱいいました。農園があり、レストランなどを併設するこの環境が、保育園の一番の魅力になると感じていました。調整区域にあるため農業しかできなかったのですが、それを逆手にとって、農業ができる保育園を立ち上げたいと考えました。



● 保育園にSDGsをどのように活用していますか？

最初は保育園でできることはないと思っていました。「子どもたちができることなんて、残さず食べるとか、ゴミを捨てないといったことぐらいですよ」と伝えたら、「それでいい」と言われました。改めて保育園でしている活動を書き出してみたら、食農保育は「12つくる責任、つかう責任」「15陸の豊かさを守ろう」など、地域交流では「11住み続けられるまちづくりを」など、SDGsに当てはまることがいろいろあることに気づきました。普段何気なくしている活動が、全てSDGsにつながっているという話を子どもたちにすると、彼らも少しずつ意識し始め、自分で食べられる量を自分で決めるようにしたことで、今では残食がほぼゼロになりました。



いつもしている活動がSDGsの取組みで、こんなに小さな保育園が、世界のためにできることはないと思っていましたが、浜松を住みやすくすることがSDGsにつながるのなら、自信を持って「SDGsを実践している」と言うことができます。

「好循環」という言葉は、この保育園の理念にもあります。「愛情をたっぷり受け、信頼できる環境で育った子どもたちは、周りの大人たちを成長させる」という育て合いの好循環を生み出し、情緒の安定、保護者の心のゆとり、地域社会への貢献へとつながっていきます。

● みんなが好循環を与え合う状態を作ることが、SDGsが目指す本当のゴールですね。

好循環という言葉と出会ったのは、父が亡くなり、愛管の経営理念を作らなければならなかったタイミングでした。最初に知ったのは生態系の話で、食物連鎖がうまく回ると自然環境が保たれるといった内容でした。好循環ってとても良い言葉だなと思い、それをどう生活に組み入れられるか考えていると、「暮らし（Life）」という言葉が浮かび、「幸せの好循環」という愛管の経営理念につながりました。ハーバード大学が幸福と健康の調査を行い、人の幸せは生まれや育ち、頭の良さや学歴、家庭の事情や資産ではなく、「良い人間関係」を築いているかが大きく影響していると結論づけました。孤独では幸せになれませんが、信頼できる仲間がひとりでもいれば、幸せになれると言っています。私は、「暮らしの好循環」や「幸せの好循環」というものを進めていかなければならないと考えています。それが地域社会の発展や、浜松の成長につながってくれたら、こんなにうれしいことはありません。そして、実際にこうした会社の理念に賛同し、東京などから浜松市に移住して働いてくれる若者も出てきています。



株式会社平出章商店

生産者とスイーツ店を繋ぐ!製菓材料加工プロジェクト

取組概要

●浜松市内の製菓製パン事業者には、商品の開発にあたり、地元の農産物を使いたくても材料に加工していないと使えない、加工工場が少ないという課題がありました。また、市内の農産物の生産者には規格外農産物を活用したい、作っている農産物の認知を拡大したいという課題がありました。

●こうした課題を解決するために、製菓製パン事業者と、生産者の間に入り、両者をつなぎながら、原料調達～製菓材料への加工～製菓製パン店への材料の販売を行っています。



はじめたきっかけ

前職で農産物調達から加工を経験した社員が入社し、地元農産物を原料とした製菓材料の開発に着手しました。少しずつ地元産原料を使用した自社商品を開発する中、原料調達～加工に関する課題を、産地、障がい者就労支援施設、購買者それぞれが連携して解決した取組について、多方面から評価いただき、それ以後、製菓製パン事業者、生産者双方からの要望も増え、自社製品の開発販売と加工請負事業の2タイプで地元農産物の加工を手がけています。

ポイント

生産者、製菓製パン事業者、障がい者支援施設など、多様なステークホルダーをSDGsでつなぎ、価値観を共有して取り組むことで、それぞれの課題を解決しています。原料には主に未利用農産物や規格外品を調達し、生産者の所得向上や食品ロス削減を図るとともに、材料を使用する製菓製パン店に産地情報や加工の取組情報を提供することで、差別化商品の開発販売にも貢献。生産者にとって農産物の認知拡大にもつながります。

地域課題と取組成果

浜松産・三ヶ日産など産地を謳ったお菓子を販売する店舗の増加につながっています。また、規格外農産物を調達している産地では、出荷者が増加した事例もあります。取組自体への関心も増え、規模の大小問わず問い合わせが増えつつあるとともに、浜松以外の産地や商社からも加工依頼を受けるようになりました。

規格外の未利用農産物を活用することで、農業者の収益増加と、食品ロスの削減に寄与することができました。

- 事業内容 製菓材料・パッケージ・洋酒・食品添加物の卸売及び小売、製菓・製パン機械販売等
- 創業年 1956年
- 従業員数 54名
- HP URL <https://www.hiraide.jp/>

●SDGsに取り組もうと考えられたきっかけを教えてください。

平出さん:SDGsが知られていない頃、家族で動物園に行き、『ゾウの森とポテトチップス』という本を買ったらゾウにエサをあげられるイベントをしていて、息子がどうしてもしたいと。せっかく買ったのだからと読んでみると、パーム油が動物や自然を傷つけているという内容で、とてもショックを受けたんです。パーム油をはじめ、会社が取り扱う植物性油脂やチョコレートにも、似たような背景があることを知り、このままではまずいと思い、知り合いで、この本を出版しているNPO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパンのスタッフと話をしている中で、SDGsについて教えてもらい、取組を始めることにしました。



●社内でSDGsの取組みは、どのように進められてきたのでしょうか。

平出さん:地元の信用金庫の方を招き、SDGs勉強会をしたのが最初だと思います。私が社長になったタイミングで、全ての社員が参加する色々な社内委員会を立ち上げ、その中にSDGs委員会があり、活動の一つとして社内へ情報共有するための「SDGs通信」を発行しています。

泰澤さん:弊社主催の展示会をしたとき、脱プラスチック製品など、材料メーカーさんが取り組まれているSDGsに関連した製品を紹介するコーナーを企画しました。しかし、2018年当時、SDGsはあまり知られてなく、製品がほとんど集まらないということもありました。

●国連事務総長はSDGsの取組みについて、「本業そのもので、課題を解決してほしい」と言っていますが、どのような事業で取り組まれていますか？

平出さん:当社の主要事業は、流通している製菓材料の仕入れ販売です。このため、種類の豊富さや価格の安さで比較されてしまいます。他社との差別化を図るためにも、お客さまのニーズにあった商品、地域に貢献できる商品、他社が扱っていない商品を開発したいと考えていました。



泰澤さん:そういった中で、農家さんから余ったレモンの皮をもらい、焼き菓子に使うレモンミンス（ピール）を作ったところ好評で、大手企業からもっと欲しいという要望をいただきました。ただ、それに応えるためには、2トンものレモンが必要でした。そこで、規格外のため一般に流通しない未利用のレモンに目を付けました。ただ、レモンの皮を大量に集めようと思うと、誰かが皮をむく必要がありますので、障がい者就労支援施設さんと連携し、皮むき作業を依頼することになりました。そのようにして、関わる人たちを少しずつ増やしながら農産物の加工商品を作っていました。

●経営理念にある「社員の幸せ」を実現するためには、仕組みが大切ですね。

平出さん:社員一人ひとりが仕事を通じて、自分のしたいことを実現してくれることが願いです。人事理念に記した「人間性を磨き、幅広い見識と経験を重ね、会社だけでなく、社会で活躍できる人材を目指す」という考えを大切に、一人ひとりの成長をサポートしていきたいと思っています。



●今後の展開について教えてください。

泰澤さん:農産物加工については、県外で行っている加工を地元で行いたいと考えています。農家さんをはじめ関係者が助け合える場や、農産物加工に関わる方々のネットワークも作りたいです。今は浜松の課題として取り組んでいます。このモデルが成功すれば、他の地域でも同じ取組ができるのではないかと考えています。

左 代表取締役社長 平出慎一郎さん
中央 つながり創造事業部 社長室室長 泰澤友和さん

浜松開誠館中学校高等学校SDGs部

開誠館のSDGs活動～生徒の思いを形にする活動～

取組概要

- SDGs部では「生徒の思いを形にする」という活動理念のもと、SDGsの達成に向けて活動しています。
- 浜松市はフェアトレードタウンに認定されていますが、市民のフェアトレードの認知度はまだ低いと考え、フェアトレード学習などに取り組んでいます。
- 国内外の学校とオンラインで気候変動について話し合う「小中高全世界気候サミット」の企画・運営や、SDGs部の部員が小・中学校に赴いて講師としてSDGs学習の入門講座を行っています。



はじめたきっかけ

授業の中でフェアトレードや気候危機・再エネについて学び、何か行動できないかと思い立ったことがきっかけです。浜松はフェアトレードタウンであり、日照時間が長いことでも有名で、ソーラーパネルでの発電量も多い地域です。そんな浜松で高校生でもできることがあると思い、常に部活でアイデアをだしあっています。

ポイント

授業の中で学んだフェアトレードや気候変動に対し、高校生でもできないか部活でアイデアを出し合い、実際の行動に移しています。

フェアトレードコーヒーの販売や、気候マーチでは環境保護に関するメッセージを書いたプラカードを掲げてまちなかを行進、小中学校でSDGsの出張授業をするなど、行動を通じ、考え方を普及させています。

地域課題と取組成果

フェアトレードの認知度向上を目的に、地域のコーヒー店とコラボレーションし、フェアトレード商品として、オリジナルのドリップバッグを作成・販売しています。フェアトレードコーヒーの販売では、初めて購入するという方も多く、そうした方々にフェアトレードの考え方を普及させることができました。また「STOP温暖化若者会議」では、市内の他校の生徒と環境問題やフェアトレードについてグループディスカッションをしました。SDGsに取り組む仲間ができ、他校の活動を知ることもできました。「小中高全世界気候サミット」は、Z世代がこれからの未来を考えるイベントで、県内だけでなく、長野県や鹿児島県の高校、ニュージーランドやモンゴルの高校生ともオンラインで交流し、世界にはまだ知らない問題がたくさんあることを学びました。

●取組形態 希望者による部活動制

●発足年 2019年

●部員数 19名

●HP URL <https://www.kaiseikan.ed.jp/>

●「グローバル気候マーチ」が有名ですが、どのようにして始まったのですか？

グローバル気候マーチは、2019年にスタートしました。当時、環境活動家であるグレタ・トゥンベリさんの訴えに共感した先輩たちが、気候変動の危機感をもっと多くの人に伝えたくて始めたと思っています。2023年のグローバル気候マーチは、開誠館の中学生と高校生の生徒約1000人で行いました。学校で決起集会を行った後、各生徒が「SAVE THE EARTH」や「ゴミをなくそう」など書いた自作のプラカードを掲げ、学校からザザシティ、市役所まで気候危機、自然環境の保護を呼びかけながら行進しました。プラカードは段ボールで作るので、マーチの後でリサイクルできます。ゴールの浜松城本丸南広場では、具体的な気候危機対策の実施を求める提言書を浜松市長に手渡しました。



●他には、どのような活動をしていますか？

2019年の気候マーチで浜松市に提言したことで始まった「STOP温暖化若者会議」があります。これは、オイスカ高校や浜松聖星高校、浜松城北工業高校など、市内の高校が参加し、環境問題やフェアトレードなどについてグループディスカッションするイベントです。準備期間中は、何度もオンラインミーティングを重ねて開催しました。準備は大変でしたが、SDGsに取り組む仲間ができた、他校の活動を知ることができたりしたので、これからの活動に生かしていきたいです。

●活動を通じて、どのような学びを得られましたか？

SDGsは意外と身近なところであって、一人ひとりの意識が変わることで達成できると感じました。私はフェアトレードに興味があり活動していますが、フェアトレードは、知名度はあるものの実際に商品を買ったことがある人は少ないというのが現状です。理由としては、フェアトレード商品はそうではない商品と比べて値段が高かったり、お店にあまり置いていなかったりすることが挙げられます。そこで、市内でオーガニックコーヒーを販売する「豆乃木」とコラボレーションして、フェアトレードのドリップコーヒーを開発、学園祭や地域のイベントで販売することにしました。実際に試飲してもらいながらコーヒー豆の背景を説明することで、フェアトレードをより理解してもらえたのではないかと思います。個人的にも、コーヒーについて学ぶことができましたし、多くの人にフェアトレードを知っていただけたのがうれしかったです。



また、印象に残っているのは「小中高全世界気候サミット」です。これは、僕たちZ世代がこれからの未来を考えるイベントで、県内だけでなく、長野県や鹿児島県の高校、ニュージーランドや姉妹校であるモンゴルの高校からもオンラインで参加がありました。学生が運営しているので、通訳は英語の得意な生徒にお願いしました。私はそのイベントで司会のサポートをしたのですが、とても緊張しました。でも、サミットに参加して気付いたのは、地域や国が違えば、抱える課題も違うということです。世界にはまだ知らない問題がたくさんあることを知り、とても勉強になりました。SDGs部では、小学生や中学生向けに出張講座もしています。楽しく学んでもらえるようクイズ形式にしたり、できるだけ難しい言葉を使わずに説明したり、時間配分や資料の分かりやすさなども毎回工夫しながら、私たち自身も多くのことを学んでいます。児童や生徒たちの「すごい!」という反応や感謝の手紙が、私たちのモチベーションになっています。



浜松学芸高等学校 社会科学部地域調査班

高校生発! 広告代理店

取組概要

●若者が市外に流出し、地域経済が停滞してしまうことが課題だと考えています。そのため、地域の観光資源や産業文化に焦点をあてたPR動画やポスターを高校生の目線で制作することで、若者をはじめとした様々な方に地域の魅力を伝える広告代理店として取り組んでいます。

●「いつか戻ってきたいと思える街として魅力を発信する」ことを目的とし、地域や企業に潜む魅力にスポットライトをあてることで、浜松の魅力を次の世代に受け継いでいます。



はじめたきっかけ

社会科学部地域調査班は2017年に学内で探究活動が開始したことに伴い発足し、当初は天竜浜名湖鉄道のポスター制作を行いました。その活動が評価され、その他の企業や団体からもポスター制作を依頼されるなど、活動の幅が広がりました。様々な依頼に対応するため、ポスター制作だけでなく、活動の拡大に合わせて「イベント」や「アパレル」など多くの部門に分かれて活動しています。

ポイント

高校生ならではの目線を通じて、次世代に「いつか戻ってきたいと思える街」として地域・地場産業の魅力を発信しています。校内の取組で終わるのではなく、地域外の高校にもノウハウを共有することで、活動の輪が広がっており、各地で若い世代が地域課題を考えることを後押ししています。

地域課題と取組成果

これまでに20を超える企業のCM動画やポスターを制作しました。地域に住む高校生が地域の企業や団体を応援する活動が、だんだんと地域に認知されているのを感じています。市外の企業や高校からの問い合わせも増え、実際に青森県、三重県、岐阜県、愛知県の高中生や自治体と協働して、取組について制作ノウハウを共有しています。

地域の高中生が地元企業などと協働して地域の魅力を発信する取り組みが認知されてきています。静岡県立森林公園ではCM制作の効果も加わり利用者が20%増加するなど、魅力の発信に貢献していると実感しています。さらに、浜松市の魅力を発信する取組を通じて、自分達自身も浜松市の魅力に気づくことができました。

●取組形態 探究活動・部活動

●設立年 2016年

●構成員数 36名

●HP URL <https://www.gakugei.ed.jp/>

● 広告代理店とのことですが、どのような体制で活動しているのでしょうか？

設立は2016年で、地域の魅力を「衣食住」の観点から発信し続けてきました。例えば、「衣」の分野では、浜松注染めを使ったシャツの市販化を目指したり、浜松注染めの浴衣を着てダンスパフォーマンスをしたりしています。「食」では、摘果みかんなどを使ったおにぎりの販売、「住」では、観光という側面から地元企業や自治体のポスターなどを制作しています。

依頼が増えたことをきっかけに、広告代理店を立ち上げ、「食品」「広告」「イベント」「アパレル」「観光」の5つの部門に分かれて活動しています。観光部門と広告部門が連携して企業ポスターやプロモーション動画を作成したり、アパレル部門とイベント部門がチームになって、浜松注染めの浴衣をPRするアイドルグループを結成し、活動したりしています。



● 実際に、どのような活動をされているのですか？

活動は多岐にわたりますが、イチオシは、浴衣アイドル「Tint²（ティントティント）」です。浜松注染め浴衣の魅力を発信することを目的に、地域イベントでダンスパフォーマンスを行い、振り付けをはじめ、三ヶ日みかんや浜名湖の夕日、遠州灘などをイメージした浴衣の配色も自分たちで決めました。私たちの卒業後も活動が継続できるよう、浴衣の色で応援してもらえるシステムにしています。

浜松注染の浴衣を着てパフォーマンスを披露することで、小さな子どもたちに夢を与え、次世代の浜松注染の浴衣ファンを増やしていきたいと考えています。これまでに、市内のイベントをはじめ青森、京都など、県外からも招かれて公演し、たくさんの方々に応援いただいています。

● 活動をするうえで大切にしていることはありますか？

2016年の地域調査班設立当初から大切にしている4つの活動ポリシーがあります。「①知っている場所から行ってみたいくなる場所への変化を促す」「②いつか戻ってきたいと思える街の魅力を発信する」「③中高生には共感を、大人には懐かしさを感じる青春を演出」「④地元の企業や団体と協働する」です。これらの活動ポリシーは、代々受け継がれていて、お話いただいた依頼については、このポリシーに当てはまるかどうか判断しています。



● SDGsへの取り組みについて教えてください。

SDGsには17のゴールがありますが、私たちは特定のゴールのための活動をしているわけではありません。私たちの活動を通じて、自然とそれぞれのゴールに貢献できるのではないかと考えています。SDGsの前文には、「誰一人取り残さない」という社会を目指すとあります。17のゴールや169のターゲットだけを見ると、自分とは関係ない課題に見えたり、難しそうと感じたりするかもしれませんが、「誰一人取り残さない」という視点で見ると、いろいろなアクションをイメージしやすいと思うし、関わりやすくなるのではないかと思います。SDGsという言葉は知っていても、授業で習うだけだと、ちょっと遠い存在に感じてしまう人も多いと思います。でも、実際に地域で活動することで、SDGsに親しみを感じるようになれるし、地域の魅力や課題にも目を向けられるようになると思います。



オイスカ浜松国際高等学校 環境SDGsプロジェクト

高校生スポーツビーチクリーン実行委員会

取組概要

- 浜松市は自然が豊かですが、海岸には、ごみの不法投棄や漂流ごみ、砂丘の浸食、海岸林の松枯れ拡大など課題があります。
- 中田島砂丘を守るため、「中田島砂丘ごみひろい選手権」や「堆砂垣設置競争」など、楽しみながら参加できる「スポーツ・ゲーム形式」のビーチクリーン活動をしています。高校生の若いアイデアを活かして、海岸清掃のイメージ改革・普及啓発を進めています。



はじめたきっかけ

2001年から、中田島砂丘でアカウミガメの保全や海岸クリーン運動に取り組んできましたが、現在は東日本大震災の教訓から学び、“災害に強く美しい海岸を目指したEco-DRR活動に取り組んでいます。その活動を広げるため、官民との連携のほか、特に地域のつながり・輪を心掛けた活動を目指して「スポーツ・ゲーム形式」を考案し、試しながら活動しています。

ポイント

環境SDGsプロジェクトは、部活動ではないため、メンバーは部活動や生徒会活動と掛け持ちしながら有志で参加しています。スポーツビーチクリーンは、環境保全活動に楽しみながら参加できるよう工夫しています。また2022年には「高校生スポーツビーチクリーン実行委員会」を組織し、浜松市ビーチ・マリンスポーツ推進協議会に加盟するなど、活動を広げられるように取り組んでいます。

地域課題と取組成果

海岸でのごみ問題や砂丘の浸食、海岸林の松枯れ拡大といった課題に対して、高校生だけでなく、企業、市民活動団体、行政と協働して取り組んでいます。スポーツビーチクリーンの取組は地域からも好評をいただいております。外部評価が高まることで、学校全体での意識が高まり、生徒自身の自己肯定感に結びついています。参加者はごみを拾うことで「捨てない心」が育てられており、活動のリピーターが増えています。海岸浸食や松枯れ、ごみ問題への関心を持ってもらう普及啓発に一步一步前進しています。今後は自然豊かな浜松の魅力を発信するために、自然災害を学び、スポーツと健康、笑顔をテーマに、高齢者の方でも気軽に参加できる活動にしていきたいです。

- 取組形態 有志メンバーで組織
- 発足年 2019年

- メンバー数 160名
- HP URL <https://www.oisca.ed.jp/>

●環境SDGsプロジェクトについて教えてください。

環境SDGsプロジェクトでは、「スポーツビーチクリーン」をはじめ、災害に強い美しい海岸を目指した環境保全活動「浜と松プロジェクト」、浜名湖のマングローブ植栽実験やアマモの生態観察などをする「浜名湖ブルーカーボンプロジェクト」、海岸林の再生活動や学校林の保全活動などをする「森づくり大作戦」など、さまざまな活動に取り組んでいます。

●「スポーツビーチクリーン」では、どのようなことをしているのですか？

海岸や湖岸のごみ問題、海岸侵食など、地域の課題に対する環境保全活動に楽しみながら参加してもらいたいという思いから、2020年に企画しました。これまでに、野球部の提案で始まった「中田島砂丘ごみひろい選手権」、女子バレー部の協力で実現した「堆砂垣設置競争」、風で砂が飛び基礎があらわになった防潮堤に砂を運ぶ「中田島砂丘バケツリレー」、丈夫な松林を育てる「松葉かき選手権」を開催しました。



●活動を通じて、ご自身や周りにどのような変化がありましたか？

写真などで見ていた中田島砂丘と、砂が無く石やがれきだらけの風景とのギャップに驚きました。がれきによる景観の悪化、アカウミガメやカワラハシミョウといった生態系への影響、海岸侵食など、一カ所にたくさんの問題が集まっていることに気が付きました。活動を通じて、物事を多面的に見られるようになったと思います。また、部活動中に校外をランニングしていた際、道路のごみが気になって拾うこともありました。そうしたらいつの間にか部員みんなでごみ拾いしながらランニングしていました。テレビや新聞から取材を受け、私たちの活動を地元や全国に発信することで、周りの人にも良い影響を与られていると思います。他校の友だちから、「新聞を見たよ、そんな活動しているなんてすごいじゃん」という連絡があり、後日、話をしたら、彼女も家族と一緒にごみ拾いをしたり、一人でボランティア活動に参加したりするようになったと教えてもらいました。

●地域の課題を、「自分ごと」として考えられるようになったきっかけはありますか？

「地域の課題」をもっと広い視野で見ると、国際的、社会的な課題につながっていて、課題に興味がない人はいても、関係がない人は一人もいません。そういうマインドでみんな取り組んでいるのではないかと思います。活動を通じて生まれた仲間との絆や、新しい人間関係のつながりが、活動を続けるモチベーションになっています。

この活動がコミュニケーションのツールになっています。初めて堆砂垣設置競争に参加したときは、新一年生が入部したばかりで、話すきっかけにもなったし、結果的にチームとしての結束力が高まりました。「地域の課題解決のため」というと敷居が高くなってしまいくけど、カラオケに行くくらい自然になったらいいですね。

環境SDGsプロジェクトは、「活動したい」という意欲がある人が集まっているので、雰囲気非常が良いです。私たちは高校生なので勉強が大事ですし、みんな、部活動や生徒会など、それぞれに掛け持ちしているので、無理をするとパンクしてしまいます。誰かが事情があってしばらく参加できなくても、別の誰かが支えることで活動が回っています。今のこの空気感が、みんなが意欲的に取り組んでいる秘訣なのかもしれません。



取組概要

●耕作放棄地などを活用し、脱炭素サイクルシステムを構築します。まず、天竜エコテラスの熔融スラグとAMF（菌根菌）をブレンドし土壌改良を行い、次に、CO2吸収量が高い早生日本桐（ジャパロニア）を育成、成木後は粉碎して研削材として利用します。その後、使用済み研削材を焼却し、再び熔融スラグとして土壌改良に活用しています。

●この循環により、CO2削減と資源の有効活用を実現します。



はじめたきっかけ

近年の記録的な猛暑、超ゲリラ豪雨の発生など地球温暖化が原因とされる異常気象が続く背景の中、脱炭素ロードマップ2050に基づいて各企業、様々なスコープ1・2・3で温室効果ガス(GHG)の排出量削減に取り組んでいます。しかし、全般的な波及不足等2050年パリ協定の遵守は困難との見解が散見されます。これらの背景を踏まえ、浜松発でCO2吸収のネガティブエミッション分野に特化した新しいシステムを開発しました。

ポイント

大きな投資を必要とせず、耕作放棄地等草の繁茂による環境悪化、治安の悪化等の問題の解決につながります。またCO2を減らすのではなくCO2を吸収するネガティブエミッションが可能なシステムです。育てた早生日本桐は、建設資材としての活用だけでなく、新しい活用方法や新しいビジネスの創出も図っています。

地域課題と取組成果

地域課題は、市民生活から必ず排出される熔融スラグの利活用です。天竜エコテラスの熔融スラグは800t／月で年間約10000tに及びます。この市民生活から必ず発生する熔融スラグの活用とAMF（菌根菌）とバイオのチカラで早生日本桐を育て脱炭素分野の新しい環境世界を構築します。天竜エコテラスからの熔融スラグは市民生活がある限り発生します。また、脱炭素社会は全世界の永久的な課題であるため、この脱炭素サイクルシステムは持続的に運用されます。今後は成木した早生日本桐の利活用が課題となります。現在は建設工事資材やバイオマス発電、ナノプラスチック等の活用を検討しています。

●事業内容 総合建設業

●創業年 1955年

●従業員数 219名

●HP URL <https://www.nakaken.co.jp/>

●CO2を吸収するシステムはどのような経緯で始まったのでしょうか？

新しい技術を建設業に取り入れる仕事をしている中で、普段からさまざまな技術者や専門家と出会う機会が多くあります。京都府立大学大学院を退官された石井孝昭先生もそういった方のひとりでした。先生は木の根に付く「AMF（菌根菌）」の研究をされており、これを成長の早い「早生日本桐（そうせいにほんぎり）」と組み合わせることで、木の成長を加速させることができると伺った時に、「これはビジネスになる」と直感が働きました。

耕作放棄地では不法投棄や害虫の発生といった問題も生じます。そこで、耕作放棄地を活用し、早生日本桐を植えCO2を吸収させれば、浜松発の脱炭素サイクルシステムができるのではないかと考えました。これを考えついたのが2024年夏の話です。さらに、CO2は「J-クレジット」として売買できる可能性もポイントです。



●現在は、どのような展開になっていますか？

2024年11月に「AMF推進協会」を設立し、現在は20社ほどが加盟しています。企業や自治体からの関心も高く、「一緒に取り組みたい」という問い合わせが増えています。特に企業は、温室効果ガスの排出量をサプライチェーン全体で削減する「スコープ3」への対応が求められているため、カーボンオフセットの活用に関心のある企業からの問い合わせも多いです。



●中村建設にとって、このビジネスはどのような位置づけなのでしょう？

当社では木を売って利益を得ようとは考えていません。この取組を通じて、さまざまな企業と出会い、新たなつながりが生まれることに大きな価値があると考えています。その結果、中村建設の企業価値が高まれば良いと思います。また、当社の「スコープ1」（自社の事業活動による直接的なCO2排出）や「スコープ2」（他社から供給された電力の使用といった間接的なCO2排出）を削減することで環境に優しい経営につながり、それをきっかけに優秀な人材が入社し、企業としての持続可能も高まり、理想的な循環が生まれたらうれしいです。

●これまで中村建設として、SDGsにはどのような取組を行ってきましたか？

例えば、現場事務所にソーラーパネルを設置する、残土を再利用する、重機をハイブリッド化して燃料消費を抑えるといった取組をしてきました。社屋の使用電力も100%再生可能エネルギーでまかなっています。しかし、それでは本当のSDGsの取組ではないと感じていました。中村建設は「環境のリーディングカンパニー」を掲げています。私自身も脱炭素について学ぶために、東京ビッグサイトで開催された環境や脱炭素関連の展示会に参加しました。建設系の展示会では中高年の来場者が多いのですが、脱炭素関連では、若い人や女性、外国人の参加者も多く、皆さん目をキラキラと輝かせている。その活気を目の当たりにして、「時代は確実に、脱炭素の方向に進んでいる」と確信しました。



●今後の展望について教えてください。

早生日本桐は成長が早いので、活用先を確保することが重要になります。当初は、当社の「ボタニカルブラスト工法」の資材に使う程度しか想定していませんでしたが、さまざまな企業と話をするうちに、バイオマス発電の焼却の燃料として使うなど、新たな活用方法が見えてきました。2030年のCO2排出量46%削減まで、あと5年。今後、スコープ3などの影響で、「CO2を多く排出している企業とは取引できない」という流れが加速する可能性もあります。そのため、早生日本桐が吸収する「マイナスのCO2」を欲しがらる企業は今後ますます増えると思います。

株式会社JACKカンパニー

遠州人が自慢したくなる街づくり～やらまいか精神で活性化～

取組概要

●地元食材を使用した「遠州料理」を通じてやらまいか精神を浸透させることを目的に、浜松市の歴史文化を盛り込んだ「遠州人が自慢したくなるお店」を複数展開しています。駅周辺の賑わいづくりとともにアクティブシニアの雇用を行っています。

●地ビールの醸造開始に伴い、廃棄される麦芽かすを放課後等デイサービスに送り、協働で堆肥づくりに取り組むことで、発達障がいのある子ども達の育成と食品ロス削減を目的とした循環型経済を実践しています。



はじめたきっかけ

「おいしさで人と人をつなぎ、家族と社会の幸せを実現します」という理念の元、家族、地域社会の幸せ、活性、躍動を胸に取り組んでいます。浜松市では、人口減少、少子高齢化に加え、地域経済の縮小、中心市街地の衰退といった問題に直面しています。そのような課題に対し、遠州浜松に江戸時代から脈々と伝わる「やらまいか精神」を食を通じて表現し、地域の活性、グローカリゼーションを意識した持続可能な社会づくりに取り組み始めました。

ポイント

浜松中心部の飲食店経営を通じた雇用の創出を行っています。特に、アクティブシニアでも働きやすい職場づくりを行うことで、人生100年時代を目指します。また、発達障害のある子ども達の貧困問題を解決するために、麦芽かすを提供し、子ども達の自給自足を応援すると共に、そこで栽培された野菜を店舗で活用する「やらまいかループ」を実施しています。

地域課題と取組成果

中心市街地の活性化のため、観光客や市民を呼び込むための郷土料理の開発と店舗展開しています。また発達障害のある子ども達の社会参加を促進するために、放課後等デイサービス サンスマイルの取組を支援。また、アクティブシニアでも働けるように、セントラルキッチンを導入し、誰でもすぐに活躍できる店舗の仕組みづくりを実施しています。農業と環境の持続可能性のため、食品ロス削減を目的とした堆肥づくりと循環型農業による野菜づくりを支援します。失敗を恐れず、新しいことに果敢に挑戦する「やらまいか精神」は、日本人にとって最も必要な考え方であるため、起業家精神育成の場として、自社運営のJACK大学を2025年に開学。2030年までに社内外で200名の在籍を目標とし、産学官連携によってターゲット4.3の達成を目指します。

- 事業内容 外食・飲料・食品製造事業
- 従業員数 130名（パート・アルバイト含）

- 創業年 2006年
- HP URL <https://jackcompany.co.jp/>

●SDGsを意識し始めたきっかけを教えてください。

最初に知ったのは10年ほど前、ワタミの渡邊美樹さんの経営塾に参加し、「これからの経営にはSDGsが重要になる」という話を聞きました。ただ、当時は深く考えず、行動に移すことはありませんでした。

本格的に意識し始めたのはコロナ禍の時です。飲食業が一時的にストップし、いろいろと勉強をする中でSDGsという言葉を目にすることが多くなりました。ただ、「とってつけたような取組」では意味がなく、組織としてSDGsも考えを根付かせ、経営に結び付けることが重要だと考えるようになりました。



●事業を始められたのはいつ頃ですか？

29歳のときに起業しました。当時から名刺には「街を元気に」と大きく書いていました。その思いは、今も変わっていません。もともと市場で働いていて、農家の方々と仲良くなり、自ら野菜を仕入れ、料理を作っていました。ちょうどバブル崩壊後で、景気が悪化し、街全体から活気が失われていくのを肌で感じました。その頃から「農家や飲食店を元気にしたい」という気持ちが強くありました。コロナ禍で街から人が消えたときは本当につらかったのですが、コロナ禍が落ち着いた今、いろいろと行動しているのかもしれない。



●どのような取組をされたのでしょうか？

2年ほど前から、私たちの会社ではクラフトビール「天竜ビール」の醸造をしています。その過程で発生する麦芽かすは、通常であれば廃棄されるのですが、これを放課後等デイサービス「サンスマイル」に送り、障がいのある子どもたちと一緒に堆肥づくりを通して、食品ロス削減を目的とした循環型経済の実践に取り組んでいます。

また、私たちの会社にとって、人手不足は深刻な課題です。他の地方都市と同じように、大学進学や就職をきっかけに若者がどんどん流出し、正社員として働く若者が減っています。そこで、若者にとって魅力的な企業になる必要があると考えました。ちょうどその頃、15年来の友人で、IPU環太平洋大学特任准教授の扇野氏の協力を得て、社内から多様なメンバーを選抜した小グループでSDGsを意識したインターナル・ブランディングを始めました。この受賞をきっかけに、社員のSDGsに対する理解が少しずつ深まってきたと思います。また、若い世代に浜松ならではの「やらまいか文化」や起業家精神を伝えたいと考え、25歳以下を対象にした実践型ビジネス塾「JACK大学」を設立しました。ここでは、店舗を活用してマーケティングやブランディングなどを学べる場を提供することで、若い世代が挑戦できる環境を整えるとともに、街の活性化も目指しています。



●20年以上続く居酒屋「濱松たん」とには、どのような特長があるのでしょうか？

「濱松たん」とは、さまざまな文化を取り入れながら遠州地域の魅力を発信することを目的としたお店です。餃子やしらすといった地元の名物や食材を使い、「遠州料理」というコンセプトを作りました。浜松には大手企業も多く、出張帰りのビジネスパーソンが多く訪れます。地元ならではの料理を提供することで喜んでいただけますし、地元の人も友人やお客さまを連れてきやすくなり、結果的にマーケットが広がりました。

15年前の経営ビジョンは「おいしさで人と人をつなぐ」でした。それが少し前に、「遠州人が自慢したくなる店づくり」へと変化し、今は「遠州人が自慢したくなる街づくり」になりました。「街づくり」にまで視野が広がったビジョンを持つことで、企業の行動が一貫し、迷いなく進めるようになりました。

服作りで心豊かによりよく生きる価値共創プロジェクト

取組概要

●地域資源である遠州織物を活用した服作りを通じた、より良い暮らしのための環境づくりを目的に、個々のライフスタイルやライフステージに合わせた柔軟な働き方を提供することで、経済的な自立を目指せる環境を整えています。

●地域や人、モノごとのつながりを大切に、「暮らしに調和するエシカルなものづくり」を実施し、企業理念「えがおのたねまき」をテーマに、笑顔が広がる価値共創コミュニティを目指しています。



はじめたきっかけ

遠州織物を使った婦人服ブランドを立ち上げの際、疾患があることで職に就くことが困難な方に出会いました。子育て期に働きたくても環境がなく困った私の経験と重なり、服作りを通じて、働きたいときに働ける柔軟な仕組みを提供したいと強く思いました。この出会いがきっかけで、「ライフスタイルに寄り添う柔軟な働き方」をブランドの柱の1つに加え、地域資源を活かし、地域の人々の暮らしを支えるという思いで服作りに取り組んできました。

ポイント

(経済) 柔軟な働き方と地域の経済成長、(社会) 女性の社会参加とジェンダー平等、(環境) 地元産天然素材によるサステナブルな生産と消費という、三側面を意識して事業を行っています。また地域の多くのステークホルダーを巻き込みながら、地域産業の活性化と、個人の主体性を尊重した柔軟な働き方の提供と経済的な自立を促し、取組を持続可能なものとしています。

地域課題と取組成果

地域産業(繊維)を活性化させ、衰退を食い止めるための「産地らしさのブランディング」に貢献することで、課題解決を目指したいと考えています。「産地らしさのブランディング」とは、素材や製品の開発だけでなく、地域全体が一体となって、産地の価値や、ストーリーを共創する価値創造のプロセスです。この取り組みは、地域資源の活用と柔軟な働き方を提供することで持続可能です。将来的には、縫製技術の向上や品質強化を図り、未経験者向けの技術講習やスキルアッププログラムを導入します。さらに、自社ブランドの制作にとどまらず、地域で新しく生まれるブランドを支援し、地域全体の繊維産業の発展に貢献していきたいと考えています。育成とサポートを通じ、持続可能なビジネスモデルを確立していきます。

- 事業内容 クリエイティブコンサルティング
- 従業員数 1名

- 創業年 2021年
- HP URL <https://siisow.com/>

●遠州織物を使った婦人服ブランドを立ち上げた経緯を教えてください。

子どもの頃から縫い物が好きで、20代前半はイタリアやヨーロッパのテキスタイルを使い、ランチョンマットなどのテーブルウェアを作っていました。個性的な素材を探すなかで出会ったのが遠州織物です。

調べるうちに、遠州地域では海外のハイブランドにも採用される高品質な洋服生地が織られていると知り、その魅力に惹かれていきました。当時、地元の生地を使った服がほとんど販売していなかったので、「それなら自分で作ろう」と思い、ブランドを立ち上げました。



●「柔軟な働き方ができる環境づくり」を意識されていると伺いました。

当初は「商品作り」が目的だったのですが、それが二の次になってしまいました。いわゆる「障がい者雇用枠」や就労支援の制度があっても、「紹介先が無い」という理由で支援そのものを受けられない方もいます。つまり、“障がい者としても働ける環境がない”という現実には衝撃を受けたんです。働く意欲も才能もあるのに、治療費がかさむからこそむしろ働く必要がある状況で、社会に受け皿がないことを、すごくもどかしく感じました。

それなら、体調の良いときに仕事ができるような、その人に合ったライフスタイルを前提とした働き方をこちらで整えられないかと考え、「体調がいいときに仕事をする」という仕組みを提案しました。



●現在、アパレル事業の状況はいかがですか？

今は「続けること」が一番の目標になっています。立ち上げ当初は、百貨店での販売も1年に1回でしたし、資金的にも厳しく、本業のデザインの仕事からアパレル事業に資金を補填しており、事業の軌道がある程度見えてくるまで3年ほどかかりました。

デザインの仕事は生業ですが、アパレル事業は「生きがい」と言うと大げさですが、最初から「ビジネス」として始めたわけではなく、お金を生むことよりも「つながりを生み出す」ことを大切にしています。

「自分に合った働き方ができる環境が見つからない」という課題に対して、「個人の強みを活かした、ライフスタイルに合わせて柔軟な働き方ができる環境を作る」という仕組み作りについて、ある意味「実験」に近い感覚で、何も保証はないけれど、とにかくやってみることにしました。

試行錯誤を続けるなかで、自分の取組が結果的にSDGsに通じるものだと気付かされました。

●SDGsについてはご存じだったのですか？

以前、仕事でSDGsについて調べる機会がありました。ただ当時は、環境問題などの取組は国や大企業がするものというイメージが強く、自分には遠い話だと思っていました。しかし、ここ数年でSDGsが普及し、生活者レベルで言語化されているのを見て、「私がしていることもSDGsに当てはまるのかもしれない」と思うようになりました。

仕事を依頼するとお金が発生します。私たちは、単に仕事を依頼して報酬を払うだけではなく、それぞれが持つスキルをシェアすることで新たな価値を生み出せると考えています。人それぞれの才能や可能性をうまく活かして、経済的にも成り立つしくみをつくりたいと思っています。



静岡県立浜松商業高校調査研究部

地域創生SDGs!!浜松焼そばの軌跡

🌈 取組概要

●浜松の地域活性化のため、浜松サービスエリアで特産品を調査した結果、菓子類が多いことが判明しました。そこで、地産地消を意識した総菜系特産品の開発を決定し、トリイソースと協力して浜松焼そば向けの特製ソースが完成しました。

●2024年5月の浜松まつり最終日には、新浜松駅高架下の「はままちプラス」で高校生による商品の販売を行い、販売にあわせて「やさしい日本語」についての調査も実施しました。



🌈 はじめたきっかけ

新型コロナウイルスの流行による自粛期間により、学校や会社が休校・休業になりました。家にいる時間が増え、休校・休業の影響で外出する人が減少したことによる飲食業の衰退により、経済の衰え、使われずに余ってしまった食材たちが廃棄されているというニュースを見て、調査研究部である私たちは「地域の活性化どころではない!!」と感じ、今、抱えている問題解決に貢献するためにこの取り組みを始めました。

🌈 ポイント

浜松の活性化を目的に、高校生が浜松サービスエリアで調査を行い、売られているお土産のターゲットやニーズについて分析し、浜松らしい特産品を使用することで「浜松焼そば」のヒットにつなげました。その後も、若い女性をメインターゲットにした、「浜松ラーメン」を開発するなど、高校生のアイデアと市場の分析という商業高校の長所が活かされています。

🌈 地域課題と取組成果

「浜松焼そば」を開発する中で、浜松らしい特産品を使い、SDGsの達成にも寄与する「地産地消」を意識しています。浜松の経済成長に貢献するために取り組んだ結果、開発した「浜松焼そば」は4年間で累計販売数が10万食以上となり、浜松の活性化に貢献しています。取組を進める中で、新たな企業と協働し、廃棄される浜松産のレモンをつかった「君にれもん」を発売し、地産地消に加えて廃棄物の削減にも貢献しています。また、多文化共生にも取り組み始め、「やさしい日本語」の普及活動など「人や国の不平等をなくそう」の達成に向けた活動もしています。また、こうした活動を通じて、さまざまな課題にも気づくことができ、新たな問題解決への一歩を踏み出すきっかけとなりました。

●取組形態 部活動
●発足年 2016年

●部員数 46名
●HP URL <https://www.edu.pref.shizuoka.jp/hamamatsu-ch/>

●入部のきっかけを教えてください。

商品開発という、ほかの部活にはない特別な活動に興味を持って入部しました。自分たちのアイデアが形になるので、すごくワクワクします。

●これまで先輩たちが、いろいろな商品を開発してきたのですね。

「浜松焼そば」はトリイソースさん、「浜松ラーメン」は加藤醤油さんと三ヶ日町農業協同組合（JAみっかび）と共同開発しました。浜松産レモンを使ったフィナンシェ「君にれもん」は春華堂さんとコラボしました。これらの商品は、浜松駅や浜名湖サービスエリアをはじめ、文化祭や吹奏楽の定期演奏会、ザザシティで開催される軽トラ市などのイベントでも販売しています。販売の場には僕たちも立って、お客さんと直接お話しします。



●1年ほど活動をしてきて、どのようなことが印象に残っていますか？

やっぱり販売です。普段はなかなかできない経験ですし、先輩たちが作った商品を直接お客さんに届けられるのがすごく新鮮でした。

2024年12月に参加した「浜松市地方創生SDGsコンテスト」が印象的でした。僕たち1年生が2、3年生の取組を紹介しましたが、発表を通じて先輩たちがどのような商品を開発し、それが浜松にどう影響を与えてきたのかを知ることができ、自分たちの活動の方向性を考える良い刺激になりました。



●商品開発をする中で、SDGsは意識していますか？

いきなり最初から「SDGsを達成しよう」と始めているわけではありません。素材を選んだり、地元企業と協力したりするうちに、SDGsにつながっていくという感じです。「浜松焼そば」なら、ゴール8「働きがいも経済成長も」にある「産業の多様化や技術向上、イノベーションを通じて、より高いレベルの経済生産性の達成」に貢献していると思います。

「君にれもん」に使っているレモンは、もともと廃棄されるレモンでした。そのレモンの加工を障がいのある方をお願いしたと聞きました。さらに、加工の仕事は、忙しい時期と暇な時期の差が大きく、「君にれもん」の生産によって仕事の偏りも平準化したそうです。浜松産のレモンを浜松で加工・生産しているという、地元のつながりもSDGsにしっかり貢献していると思います。

●プロジェクトはどのように進めていますか？

まずは個人で浜松の課題を調べて発表し、方向性が似ている人とグループを組んで進めていくことが多いです。テーマとしては、音楽、農業、子どもの遊び場、ものづくり、食品ロスなどが挙がっています。

現状を知ることが大事なので、調査をしたり、お話を聞いたりして、そのうえで「どうしたらいいか」をみんなで話し合いながら進めています。



●今後の展望を教えてください。

今はそれぞれ興味のあるテーマについてリサーチしている段階ですが、商業高校ならではの視点を生かし、大人とは違う高校生のアイデアで商品やサービスの企画・開発に携わっていきたいです。「これはいい商品!」「これはいいサービス!」と自信を持って言えるものを作り、それが地域の課題解決につながり、浜松で暮らす人に喜んでてもらえたらうれしいです。

浜松市の子どもの貧困を変えるためにフィンランドに留学!!

取組概要

- 全ての子どもたちが幸せに暮らせる浜松市を目指すために、浜松市内の子ども食堂でボランティア活動をしています。
- また、もっと多くの子どもたちを救いたいという思いから、静岡県の「ふじのくにグローバル人材育成事業」に応募し、子どもの貧困に関する先進国であるフィンランドに留学し、日本とフィンランドの違いや現地の教育について学ぶとともに、帰国後は県内の学生を集めた学生団体を設立し、フィンランドの取組や浜松市の課題など情報発信等に取り組んでいます。



はじめたきっかけ

中学の時にSDGsについて学習し、子供の貧困に興味を持ちました。浜松市は幸福度が高いですが、子どもの貧困率が高いという現状に気づき、市内の子ども食堂でボランティア活動をはじめました。そしてもっと浜松市の子どもたちを救いたいと思い「ふじのくにグローバル人材育成事業」という留学プログラムに応募しました。世界幸福度ランキング一位、子供の貧困率が世界で二番目に低いフィンランドに留学をすることで浜松市の貧困問題を解決できるのではないかと思います留学をしました。

ポイント

ボランティア活動では、「貧困をなくそう」や「飢餓をゼロに」、フィンランドでの留学は「貧困をなくそう」、「質の高い教育をみんなに」、「人や国の不平等をなくそう」の達成につながっていると感じています。子ども食堂は子ども同士や親同士のコミュニケーションの機会になるだけでなく地域の多様な人とつながることができます。

地域課題と取組成果

静岡県の学生を集めた学生団体を設立し、浜松市だけではなく静岡県のためにInstagramでの発信をしています。浜松市の子どもたちの貧困が原因で夢や挑戦をあきらめることがない環境を作り、子供たち全員が幸せになれる浜松市にしたいと思っています。そのために、子ども食堂でボランティア活動することでより多くの子供たちが美味しいごはんを食べることができる環境創りをお手伝いしています。またフィンランドに留学をした内容をInstagramで発信し、より多くの人が浜松市の課題やフィンランドの教育や福祉について知るきっかけをつくっています。

フィンランドで学んだことや浜松市のこれからについて講演会で話す活動や学生団体でのボランティア活動やイベントの開催を予定しています。

- 取組形態 個人
- 発足年 2024年
- HP URL <https://www.instagram.com/fujis.teens/>

●子どもの貧困に関心を持ったきっかけを教えてください。

中学校でSDGsについて学んだことがきっかけです。その時に子供の貧困に1番興味を持ちました。高校生になり、探究の時間で浜松市役所の方にお話を伺う機会があって、子供の貧困などについて色々聞かせていただいたこともきっかけだと思います。私は、小さなころから子どもを助ける医師になりたいかったのですが、血を見るのがどうしても苦手で……。今は、法の力で子どもを守る弁護士になりたいと思っています。そのために、貧困やいじめなど、子どもたちが抱える問題の根本を高校生のうちに学びたいと思うようになりました。

●フィンランド留学では、どのようなことをしましたか？

2024年の8月から9月の1カ月間、首都ヘルシンキと、その隣のエスポーに滞在しました。小学校2校、中学校2校、高校1校を訪問し、アシスタントティーチャーとして先生のお手伝いをしたり、授業を受けたりするほか、日本や静岡について紹介する機会もいただきました。



●子ども食堂のボランティアは、いつから始めましたか？

2024年の6月ごろから参加しています。フィンランド留学のための留学エージェントがなかなか見つからず、以前通っていた英語教室に相談しました。その英語教室の隣で子ども食堂が開かれていて、「参加してみない？」と誘われたのがきっかけでした。子ども食堂は毎週水曜の17時から始まるので、学校が終わってから駆けつけ、準備や配膳を手伝っています。私を含めて3人の高校生がボランティアとして活躍しています。



●フィンランド留学や子ども食堂のボランティアを経験して、普段の生活や行動に変化はありましたか？

留学やボランティアを始めるまでは、自分から行動するのが苦手でした。本当は「やりたい」って思っても、「私には無理かな」と思って諦めてしまうことが多かったです。でも、一歩踏み出したことで、自分の思いをしっかりと発言できるようになったし、行動に移せるようになりました。

●帰国後、高校生団体「Fuji's teens」を設立し、代表もされているそうですね。

はい。「静岡の全ての人が幸せに暮らせる街」を目指して、「Fuji's teens」を設立しました。文部科学省の留学支援制度「トビタテ! 留学JAPAN」を利用して留学した静岡県の高中生20人ほどが参加しています。子どもの貧困を解決するには、私ひとりの力では限界がありますし、私の視点だけでは考えが偏ってしまいます。「トビタテ! 留学JAPAN」には、福祉や観光など、さまざまな目的で留学した高校生がいるので、いろいろな視点を集めることで、よりよい静岡になるのではと思いました。今では、全国の「トビタテ! 留学JAPAN」の仲間も参加してくれるようになりました。



●今後の目標を教えてください。

「Fuji's teens」の活動がんばりたいです。子どもや高校生をはじめ、誰もがチャレンジの一步を踏み出せるきっかけになるイベントを開催するのが目標です。地方創生SDGsコンテストで企業のSDGsの取組なども知ることができたので、イベントを開催する際にはそういった企業と関わると良いと感じました。アンケートでは、子ども食堂を知らない小学生がいることも分かりました。子ども食堂やSDGsなどについては、小学生の頃から知っていた方が良いと思うので、学校に行き出張授業などしてみたいです。また、SDGsを通じて空き家問題にも関心が出てきていて、大学生になってからの話ですが、市外に出た若者のUターンにつながるような空き家の活用について、企業や行政と連携して取り組んでみたいと思っています。

浜名湖ブルーカーボン未来創造プロジェクト

取組概要

●地元の漁業組合や市民活動団体、企業、行政と協働し、浜名湖の水質調査や生態系の調査、観光資源の保全、自然景観の保全、水産業の復活等につながる取組を数多く実施しています。

●生態系の調査では、マングローブの生育調査やアマモの生育実験、ドウマンガニの養殖実験や、アサリの再生実験に取り組んでいます。景観保全では、浜名湖マングローブ干潟への漂流ごみの清掃やSUPでのごみ拾い、「浜名湖ごみ拾いシティマラソン」など、浜名湖の美しい景観を守るための取組を行っています。



はじめたきっかけ

1994年8月に土壌改善実験として、県に許可を取り「マングローブ植栽実験」を開始しました。現在は植栽地を拡張し、土壌・水質浄化実験、自然環境・景観保全を通して地球緑化の在り方を研究するとともに、湖畔に生徒の手で策定・整備して環境散策路を設けました。地域社会や近隣幼・小・中・高校・大学の環境学習教材としても提供し、本校の運動部、自然科学部、マリンスポーツ部と連携して地域社会の環境意識啓発に取り組んでいます。

ポイント

1994年から30年という長期にわたり継続して「マングローブ植栽実験」に取り組み、生徒が環境散策路を整備し、地域の小・中・高校・大学の環境学習教材にもなるなど、持続的な取組であると同時に、地域社会の環境啓発にも貢献しています。また、アマモの再生による水産資源の回復、炭素の吸収・貯留に向けた取組を進めており、活動の範囲を広げています。

地域課題と取組成果

浜名湖は、浜松市の象徴的な地域資源の一つですが、干潟の減少、水中の栄養分減少、地球温暖化による水温の上昇、赤潮の発生などが問題視されています。ごみ拾い等による景観保全に取り組むほか、マングローブやアマモ等の育生は、生態系を豊かにし、水産漁獲量を回復させ、浜名湖水産業の復活に効果が期待されるとともに、炭素の吸収・貯留は低炭素社会につながり、吸収・貯留された炭素を数値化することで、新たな資金（ブルーカーボンクレジット）を得ることも期待できる取組となっています。またマリンスポーツ部が中心となり、近隣小・中学生等へのマリンスポーツの普及や水辺の安全教育、環境教育などを行っており、地域への環境意識啓発にも取り組んでいます。

- 取組形態 有志メンバーで組織
- 発足年 2019年

- メンバー数 160名
- HP URL <https://www.oisca.ed.jp/>

●「浜名湖ブルーカーボン未来創造プロジェクト」が始まったきっかけを教えてください。

30年ほど前、本校のすぐそばに人工干潟が造成され、悪臭が発生するようになりました。そこで、本校では、静岡県の許可を得て土壌や水質の浄化を目的にマングローブの植栽を始めました。その後、生徒たちが浜名湖湖畔に環境散策路を整備したり、自然環境や景観保全を通じて地球緑化について研究したり、近隣の幼稚園や小学校などの環境学習の場を提供したりと、地域の環境意識を高めるための活動を続けてきました。ここ数年、国際的にも「ブルーカーボンクレジット」の取引が注目され、私たちがこれまで取り組んできたマングローブの植栽や、アマモの育成実験をもっと活用できるのではないかと考え、「浜名湖ブルーカーボン未来創造プロジェクト」が立ち上がりました。



●具体的にはどのような活動をされているのですか？

浜名湖ブルーカーボン未来創造プロジェクトでは、「浜名湖の景観保全」「浜名湖の生態系の調査」「観光・産業資源」の3つを柱に活動しています。

景観保全活動の一つとして「スポーツビーチクリーン」に力を入れています。「浜名湖ごみ拾いシティマラソン」は、TBSテレビ「THE TIME, 全国中高生ニュース」のSDGs特集で紹介されました。

マングローブやアマモの育成実験、透明骨格標本の製作などを行っています。アマモは魚介類の産卵・生育場所となる重要な海草ですが、温暖化や台風の影響で浜名湖のアマモは急速に減少し、生態系にも大きな影響を与えています。アマモの再生は生態系を豊かにし、アサリなどの水産漁獲量の回復につながるだけでなく、炭素を吸収する特性を持つため、脱炭素社会の実現にもつながると考えています。



●環境SDGsプロジェクトに参加したきっかけを教えてください。

幼い頃から生き物が好きで、浜名湖の環境について学ぶうちに興味がどんどん深まり参加するようになりました。アマモやアサリの減少は心配ですが、浜名湖にたくさんの生物が戻ってきてくれたらうれしいです。

●「浜名湖ブルーカーボン未来創造プロジェクト」のゴールや目標を教えてください。

マングローブも大きく育ってきているので、いつか浜名湖の観光スポットになったらうれしいです。現在、市民団体の方々と一緒に、弁天島のいかり瀬にマングローブを植える計画も話し合っています。

また浜名湖でSUPをしているときに、「湖面にごみが浮かんでいない」というのがひとまずのゴールだと思います。地元の方々も、観光客のみなさんも、きれいな浜名湖でマリンスポーツを楽しめたら良いと思います。



●今後の目標を教えてください。

アマモの育成をもっと頑張っていきたいです。今、企業や市民団体の方々から資料をいただき、8種類の植え床を使ってアマモの種からの生育を比較する研究を始めています。こうしたデータを積み重ねて、アマモの再生や浜名湖の生態系回復につなげていきたいです。